

「東海紀行」



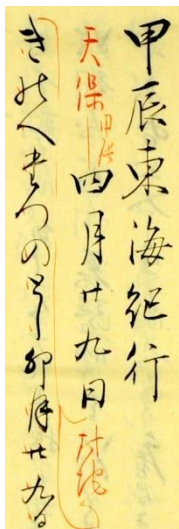
福井藩主 松平春嶽（慶永）による参勤交代の旅の記録です。天保 15 年（1844）、当時、春嶽は 17 歳でした。この年は、江戸から福井への「交代」で、4 月 29 日に出発し、東海道を經由して 13 日後の 5 月 11 日に到着しています。

あわただしい 1 年

春嶽は、前年の天保 14 年 5 月に初入国しています。福井藩の参勤交代は 3～6 月が中心でしたので、この時期は通例どおりです。そのため、先例に従えば、以降は翌年に江戸へ「参勤」、翌々年に福井へ「交代」、というサイクルになるはずですが。

しかし、それから約半年後の天保 15 年 1 月、春嶽は江戸にいました。これは、正月中の「参勤」を命ぜられていたためで、1 月中に福井から江戸へ「参勤」しています。そして、それからわずか 3 か月後、前年の初入国に続いて、再び「交代」しました。このように春嶽は、初入国から 1 年の間で 3 回、参勤交代の旅をしています。

「筑山先生」の宿題



↑ 添削例

春嶽は、江戸で儒者の成島筑山なるしまちくざんから教えを受けていました。帰国が決まると、春嶽は筑山に「今年は『道の記』を書いて見せなさい。」といわれています。つまり、「東海紀行」は、先生からの宿題だったのです。

「東海紀行」には、ほぼ全ページにわたって朱筆で添削された跡があり、書式の統一などを含めた校正もなされています。ただ、奥書がありません。序文の末尾には「皐月

春嶽」とあるのですが、年が書かれていないため、やはり何年に書かれたのかは、わかりません。

一方、福井市春嶽公記念文庫（福井市郷土歴史博物館蔵）には「天保甲辰東海紀行」という資料があります。こちらには奥書があり、「右弘化二年乙巳之春奉命令謹書之 臣高野進」と記されています（高野進（半右衛門）は後の藩儒、当時は御書院番組）。書名のとおり、「東海紀行」と「天保甲辰東海紀行」とは、相互に関連しています。このふたつは同一の内容で、福井市春嶽公記念文庫「天保甲辰東海紀行」には、松平文庫「東海紀行」の添削・校正が反映されています。そのため、「東海紀行」は、天保 15 年 5 月中旬から翌弘化 2 年春まで、福井到着から次の出発までの間に書かれたと考えられます。

春嶽 17 歳、天保 15 年春の参勤交代

この時は、東海道を經由しています（春嶽が初めて中山道をとったのは、弘化 3 年〈1846〉の参勤交代〈江戸発・福井着の「交代」〉です）。具体的には、東海道を西へと進み、尾張国の「宮」（現在の愛知県一宮市）で美濃路に入ります。そして、美濃路の西端、美濃国の「垂井^{たるい}」まで行き、そこから中山道に入ります。中山道は一駅だけ、次の美濃国の「関ヶ原」で北陸道（北国街道）に入り、福井へと向かいます。



移動手段は、馬に駕籠、時には徒歩、川や湖にさしかかれば、船にも乗りました。現代よりも天候に左右されやすく、たくさんの川や峠があり、箱根や大井川といった難所も待ち構えています。

初入国と同じ道、同じ季節でも、1 年の時が経っています。春嶽は、この江戸から福井までの 13 日間の旅で、なにを見て、なにを聞き、なにを感じたのでしょうか。